

『かなめいし』の文芸性

— 虚構化の方法をめぐって —

小 原 亨

—

『かなめいし』（寛文二丁三年刊）は、寛文二年五月一日から四日にかけて起こった「京畿大地震」を契機として書かれた仮名草子作品である。上・中・下の三巻から構成される。作者の浅井了意は、先に『むさしあぶみ』（寛文元年刊）により、いわゆる「明暦の大火」の惨事を写実化していた。火事と地震の違いはあるが、現実の災害に取材して悲惨なできごとを点描しながら、災害時巷間に現われた人間諸相を見聞・報告した作品として、これまで両者は扱われてきた。たとえば坂巻甲太氏や野田壽雄氏が「報告文学」としたり、渡辺憲司氏が「ルポルタージュ文学」としたことなどである。あるいは、「ノンフィクション」との呼称を与えられたこともあった。

「ノンフィクション」に要求されるのが「迅速さと記事の精確さ」であるならば、地震発生からおよそ一年以内に刊行されたことの迅速さ、発生の日時、被害の様相などの記事の精確さは、『かなめいし』の眼目とするところである。おそらく了意はこの時京に住まいしていたであろう。洛中の被害を描く場面は、了意が体験・見聞したことを活写し構図化している。また、中巻以降の地方各所の被害の様子などは、後に見聞・取材したものではあるが、ここでも記事の精確さがある。現今の活字報道と同様、了意は自ら体験した大災害の事実（ノンフィクション）を

ルポ（現地報告）している。

しかし一方で、早くから『かなめいし』のもつ文芸性も先学諸氏により言及されてきた。「報告文学」とされた坂巻甲太氏にあっても、「作者了意が地震と言う特異な災害をある余裕をもって描いている」^⑥と見て、そこに滑稽味が付加されていることを指摘されている。井上和人氏も「時に虚構を交えることは注意したい……読み物としてのおもしろさをねらった結果である」^⑦と、了意の物語創作の意図に触れられている。早くに史料との相関は詳しく指摘され、その事実性については説明された。最近では、それら史実との照合を受けて詳しい頭注が施された活字版も刊行された。^⑧『かなめいし』の評価に適した環境が作り上げられつつある。

視点の移動で各地の災害の様子を各章ごとに描写しながらも、ところどころで了意は虚構を織り交ぜている。その創作意図はたしかに「読み物」を企図した。各章に配置される狂歌もその点で同様の意図があり、狂歌咄の構造も作り上げている。本稿では上巻の分析を通じて『かなめいし』の記録・報告性（ルポルタージュ性）と文芸性（虚構性）との関連を見てみたい。

二

『かなめいし』上巻は「序」を含めて十一の章段からなる。それは地震が発生した「五月朔日」の一日を順々に記述している。洛中各所の被害を報告しながら、地震に見舞われた人々の不幸や、恐れ逃げ惑う諸々相をも構図化するものとして構想された。各章の題を見渡してもそのことがよく理解できる。

序

- 一 地震ゆりいだしの事
- 二 京中の町屋損ぜし事
- 三 下御霊にて、子どもの死せし事
- 四 室町にて、女房の死せし事
- 五 大仏殿修造 井日用のもの、うろたへし事
- 六 耳塚の事 井五条の石橋、落たる事
- 七 清水の石塔 井祇園の石の鳥居 倒事たふさ
- 八 八坂の塔修造 井塔のうへに、あがりし人の事
- 九 方々小屋がけ 付門柱に、歌を張ける事
- 十 光り物の、とびたる事

実際の地震災害をルポルタージュしている部分は、一章での発生の日時と発生時の様相、二章、八章での町屋や寺社等の損壊と、人々の避難の様子、九章での避難小屋の様子などに詳しく著されている。一章では「五月朔日、巳のこくばかりに…うしとらのかたより、何とハしらず、どうく」と鳴ひゞきて、ゆりいだす」と、地震発生時刻は『日本地震史料』所収史料と比較してほぼ正確^⑩に記述される。二章では「家居、

つぎくしく(つきづきしく)、つくり、みがれし、かたぐ、堂舎・仏かく・社頭に、いたるまで、あるひハ、棟木くじけ、梁ぬけて、瓦おち、垂木おれ、さしもの碎て、軒かたふき、あるひハ、鳴居鴨居ハ、ゆがみ、すぢり、さしこめたる戸障子どもを、ひらかんとするに、つまりて、あかず」と、目前の景として写實的に倒壊の様子が描かれる。三章では下御霊神社の倒壊と、崩れた石灯籠の下敷きになって死んだ二人の子どもが記述される。これは「御れうにてはゆたて有、石のたうろの下にて小人死^⑪」と史料にあるように、史実に基づいた記述である。四章の二条室町の商家の女房が倒壊した土蔵の瓦で頭を撃ち、崩れた壁に埋もれて死んだ話は事実関係が不明であるが、商家の倒壊、土蔵の崩落などは、おそらくこうであつたろうという想像を読者にさせるに十分精細な記述である。五章の方広寺大仏殿の揺れ動く様子、六章の耳塚の崩落、七章の清水の石塔の破損、祇園社の石の鳥居の倒壊、八章の八坂の塔の被害など、事実に即した記述がなされていく。九章では「北野・内野・むらさき野」以下、洛中洛外の東西南北全ての避難小屋の場所も詳細に記録される。これらにより洛中騒動の様子がリアルによりみができる。まさしく了意はその意味では取材し、記録し、報告している。

また、最初の地震発生は五月朔日の夕方より雷雨があつたことなども史料に照らし合わせて事実に基づくものである。さらに十章で報告される「寺町、三条のわたりより、みなミをさして、火の玉の、とびける」のも、事実であつたらしい。

しかし、『かなめいし』は全くの事実報告のみに終わらない。以上の事実に基づく報告の間に、了意の作為が挿入されるのが『かなめいし』の特徴である。作為の現われとしては早くも一章の地震発生時の天候に窺える。

空かきくもり、塵灰の立おほひたるやうに、みえて、雨げの空にも、あらず、夕立のけしきにも、あらず。

この前兆とも言える不気味な空の雰囲気は、史料によれば実際は「旦ヨリ小雨」とあり、了意の記述とは相違する。そこに「不気味さを強調するための虚構」と解釈するのも可能であろう。ここに現われた了意の作爲は、物語の導入においての企図があった。「序」との関連である。

「上巻目録」では一章の前に「序」として数行の文章が配置される。「春すぎ夏も来て、やうく、なかには成ゆけは(ば)」で始まる文は、「藤・山吹・卯の花・やまとなでしこ・つゝじ」などの花々が咲きあふれる風景を描写し、「山ほとゝぎすの声・早乙女の田うた・かはづの声(声について記述上は現われないが、文脈上で読者には蛙の声が自ずから思い浮かんでくる)」などのどかな音声を描写する。謡曲「杜若」「飛鳥川」「徒然草」などの文辞をふまえた「序」は、読者をずいぶんのどかな気分にする。序文とは本書刊行の契機となつたできごとであるとか、執筆の動機など、作者の気構えが記されたものが多い。だが、この「序」には『かなめいし』執筆の契機や動機となる歴史的事実(京畿大地震)執筆意図といった了意の心的告白の記述は微塵もない。謡曲「飛鳥川」をふまえたことにより、無常感が裏付けられてはいよう。その意味では、これから始まる未曾有の災害が了意に無常感をもたらせて、それを物語の始めに暗示させる意図は十分考えられる。しかし、「序」にはそれ以上の役割もあるのではないか。

「序」でのどかな気分になつた読者は、続く一章でいきなり不気味な気分の地震発生に記述にふれる。これほどのどかな夏の日が、いきなりの不気味な空の変化と地鳴りにより、急転して恐ろしい数日への始まりとなる。

雨氣の空でもなく夕立のけしきでもない空が、一転「空かきくもり」龍のあがると、いふものか」となる虚構は、読者の気分を急激に変化させるのに効果的である。もちろん『かなめいし』のこの部分は、流布本系の兼良本『鴨長明方丈記』(室町中頃成・以下『方丈記』)から「元暦二年の比、大なぬふる事」の記述を意識してもいよう。その意味では、元暦の大地震に比すべき大地震の暗示となり、読者のイメージ化を容易にする。比較のために『方丈記』の部分を抜き出してみる。

元暦二年の比、大なぬふる事侍き。…いはんや、宮このほとりには、在「所」、堂舎塔廟一としてまたからず。或はくづれ、或はたふれたる間、ちりはいたちのぼりて、さかりなるけぶりのことし。地「こき家やぶる」音、雷にことならず。家のうちにをれば、たちまちにうちひしげなんとす。はしりいづれば、又地われさく。羽なければ空へもあがるべからず。龍ならねば雲にのぼらん事かたし。おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞおぼえ侍し。

あるいは後述するように、三章の子どもが下敷きになつて死ぬ描写にもみられるなど、了意が『方丈記』を意識していることは確かであろう。しかし、『かなめいし』は『方丈記』の単なる「もぢり」ではなく、発想の継承でもない。なるほど字句的には類似のものもあるが、「ちりはいたちのぼる」るさまを了意は天変地異の前兆に用いる。『方丈記』が「龍ならねば雲にのぼらん事かたし」と地震から逃れがたいことへの比喻に用いるのに対して、『かなめいし』ではやはり地震の前兆を現わす天変に用いる。『方丈記』の記述を効果的に用いることで地震発生直前の不安を再現している。

地震は火事や雷などと違い、突然襲ってくる災害である。それまで平穩であった日常生活がいきなり変化する。その変化の急激さを、了意は「序」から一章の始まりにかけて、劇的な構成で描いて見せている。ここに了意の物語化に向けた作為の一端がみられよう。

三章では下御霊社にて死んだ二人の子どもの家を「一人八琴屋、一人八鞠やの子にて侍へりし」と、四章では死んだ女房の家を「百足屋のなにがし」とする。それぞれの家の真偽は不明で、家の記述に関しては、おそらく了意の虚構であろう。読者に現実感をもたせるべく、まず人物を「琴屋・鞠屋の子、百足屋の女房」と実在の商家に付帯させる。その上でこれら二章には、誇張してまでも地震の悲惨さを伝えようとする了意の意図がある。まず了意は、子どもが石灯籠の下敷きになった様子を具体的・解説的に記述する。

にげいづべき方角を、うしなひ、心きえ、たましぬ、うろたへて
せんかたなく、おそれ、もだえ、石燈籠に、いたきつきし所に、や
がて、かのいしどうろう、ゆりかたふきて、打たをれしかば、二人
の子ども八、これに、うちひしかれ…

子どもが崩れた建物の下敷きになって死亡する話は『方丈記』にも類似のものがあり、了意もそれを意識してはいた。だが『方丈記』には、一般的な情感の内に収斂される悲哀感があるだけである。

ついでのおほひの下に…あそび侍しが、俄にくづれうめられて、
あとかたなくひらにうちひさがれて、二の目など一寸ばかりづつ
ちいだされたるを、父母かゝへて、こゑをおしまずかなしみあひて
侍し

この『方丈記』の記述に比べ、了意は下敷きになった子どもの姿を「かうべより、手あしに、いたるまで、つゞく所なく、きれぐになりて、死ける」と、かなり衝撃的に描く。また、家族の悲しみも目に見えるように哀れに描く。

子どものおや、はしりきたり、そのかほかたち八、ひしけて、見えねども、血に染かへりし、きる物は、まがふ所なくそ、なりければ、母も氣をうしなひ、父も声をあげて、只なきに、なきけれども、かひなし

これにとどまらず、さらには「ちぎれたる、かばねを、とりあつめ、涙とゝもに、俵にいれ、人して、もたせて、家ぢに立帰る」とまでショッキングな描写を入れ、悲哀感をかきたてていく。『かなめいし』を読む読者の衝撃は『方丈記』より深い。わずかに「石のたうろの下にて小入死」とのみ記述されただけのできごとを、了意は具体性をもたせ衝撃的な描写で表現した。この点で、「悲惨なる事件をより悲惨な事として…潤色をなすことによって、読者に悲惨なる景を彷彿とさせるに役立っている」との小川武彦氏の見解に、筆者も同意するものである。了意の作為は、グロテスクとも思える描写を通じて、物語の中で悲哀感を増幅させる。

四章の「百足屋の女房」の死も、その情況が凄惨に描かれる。

あえなく打ひしかれ、腹八、わきより、さけて、内なる子は、いまだ五月いづきばかりなるが、はらわたに、まとハれ、血に、まみれて、なだれ出けるを見るこそ、かなしけれ

ここでも女房の年を十七歳と設定するなど、現実感をもたせての上での悲惨な死の描写である。三章に続いて四章でも悲惨な場面に出くわす読者には、一・二章から読み続けてきた地震の不安と恐怖の中で、ここで悲しみの頂点に達する。これほどまでに地震のもたらす不安と悲惨を了意の作爲は伝えていく。

また、五章で大仏殿が崩れる記述があるが、方広寺大仏殿はこの当時幕府の政策により解体させられていた。そのため地震の原因を、方広寺大仏の罰に付会する説が広く巷間にささやかれていたらしいが、ここでは「日用のものども」にその説を言わしめている。一般的な風説を紹介するよりも、現実到大仏殿で働く「日用のものども」が、仏罰だと恐れ慌てふためく様を挿入するほうが、読者にはより現実的で身近な感覚で受け入れられる。ここでも読者には現実性を感じ得させられる場面である。

六章で五条の石橋が崩落することも諸記録により事実が確認されても、了意はここで人間の運命を描いてみせる。「一人八、橋げたの石に、うたれ、くだけちりて、死たり」となるが、「いま一人八、…橋板の、おつるに、のりて、下におちつき、やがて絶いりしが、ひざのあたり、すこし打やぶれたるばかりにて、やうく、よみがへり、夢のこゝちして、はうく、家に、かへりぬ」と、ほとんど無傷で助かったことを描写する。それは「運のつよきもの」として了意も「ことハリ也」との感想をもちます。実際、地震の中でも紙一重の幸運で生命が助かった者は数多くいたであろうし、その人々の喜びは想像に難くない。災害時のエピソードをそういった人間の運・不運に収斂することで、了意は奇譚への傾斜をしている。この物語の直後に「荷おひたる馬ども」が五条橋にさしかかって地震に怖れて少しも動かなかったことも、「橋のおつべき事

を、しりけるかと、諸人、是を、あやしみけり、いと、きどくの事にこそ」と奇譚に収斂させる。虚構がもたらす物語化の企図であった。

そうしたとき、先の「下御霊社」での子どもの死も、「けがれたる火を、くひて、親にも、しらせず…神の御とがめにて、かゝる事に、あひ侍べりける、とかや」と、了意は因果で説明する。「とかや」と世間の言説の形式をとってはいても、ここでは婉曲にすぎず了意の認識である。天災による不慮の死でさえも因果に収斂させる発想が込められた。そうであるからこそ「きれぐ」になりて、死けるこそかなしけれ」や「あまりに、みるめの、ふびんさ」と述べてはいても、了意の視線は冷徹である。三章の末尾に、「とふらひける僧」のものとして示される狂歌「とてもはやうちひしかれて死するからいしどうろを五輪ともみよ」には突き放したものがある。

三

奇譚へ傾斜したような了意の物語化への発想は、名所記や狂歌の手法にまで発展する。各章ごとに狂歌が挿入されるのは、そのことだけを取り上げてもすでに狂歌咄の形式である。五章では、「東大寺大仏」が「斉衡二年五月五日の大地しん」で頭部を揺り落とされた記事を挿入し、名所見聞記の要素の導入に踏み切っている。

六章では前半に「耳塚」が倒壊した記述があるが、ここでも了意は冒頭に「耳塚」の由来を述べ、名所記的な発想をみせる。さらに、地震で出現した「深きあな」へ「ある人」が狂歌を詠み入れるが、「あなの底より…返哥と、おほし」き狂歌が返ってくる。「耳塚のおほくの耳よこ」とハankaする地しんを聞やつたへし」と「耳」にこじつけた言問に対して、返歌では「もろこしもゆりやしぬらん大なゆに今こそ耳のあなハ

あきけれ」と、見立ての笑いに集約させる。この章に至っては地震の悲惨さは後退し、名所記的発想と狂歌咄の構想が前面に出てくるようになった。

名所記的発想は続く七章でもみられる。「祇園の南門に、立られし石の鳥居八、津の国天王寺の鳥居に、なぞらへゝ額八、これ、青蓮院の御門跡、あそ八され給ひ」と、ここでも鳥居の由来が導入される。鳥居の崩壊の後に展開される逃げ惑う人々の様子は、滑稽性を付与されて描写される。

おや八、子ですて、兄八、おとゝを、わすれ、あるひ八、わが妻の女房かとおもひて、人とめ女の手を、ひきて、にげいで、あるひ八、わが子とおもひて、茶つばを、いだきて、はしりいで

「人とめ女の手をひく男」と「茶つばをいだきて走り出す女」は、挿し絵にまで構図化されてクローズアップされる。了意自身もそれらの狼狽に対し「をこがましき、ありさまどもなり」と、三・四章での「悲しかるべき」とした述懐とは異なつた認識を示す。さらに、八十四五歳になつてもなお茶屋遊びをする「井づゝ屋の、なにがし」の、茶屋から「はづゝ、にぐる」様子を、「ある人、かくよみて、わらひけり」と狂歌で笑いとばしてみせる。

としたけてまだ生べしとおもひきやいのちなりけり茶屋のながにげ「井筒屋」への皮肉と嘲笑を込めたこの狂歌で七章は結ばれる。

八章でも冒頭で八坂の塔にまつわる後鳥羽院の故事、浄蔵賣所の故事が紹介される。ここでは当初から名所記的な発想が先立っている。了意

は実際の地震の被害への記述には及んでいない。塔の修理のために上に登つた者たちが、地震の揺れを下の「わかきものども」が揺れるものと勘違いする滑稽譚となる。末尾の狂歌も

椎柴のこりはてにけり後生だていま八八坂のたつとげもなし

と、駄洒落のおかしみで括られる。

九章では「五月朔日、昼のうちに、五十六度、その夜にいりて、四十七度に、をよべり」と、揺れの詳しい回数や、「土蔵にくづれたる事、京都に二百余庫なり、打ころされける人、四十余人とかや」と、被害の具体的な数値を記述してルポルタージュへの回帰も見せる。さらには避難小屋が形成された場所も、十四カ所にわたり詳しく地名が記されている。余震が続く「五月朔日」、各地の小屋に避難する「貴賤上下、あはてたる、ありさま」を描写して、了意は衡学的とさえ思える記述に及んでいる。しかしながら、小屋に避難した「ある姫御前」の詠む狂歌に至つて、やはり咄の発想の内に収斂される。

わくら八にとふ人あらは小屋のうちにしとをたれつゝわぶとこたへよ

狂歌には卑俗な滑稽感がなく、もはや地震のもたらす恐怖感や悲愴感は全く後退している。それまで詳述してきた被害の件数・人数、避難する人々の狼狽などとは全く無縁の狂歌の配置は、一見唐突にも思える。ここでも了意の作為は狂歌咄の卑俗性・滑稽性を志向している。唐突であるがために、さらに滑稽感が浮き彫りにされている。

九章後半では「禁中より、いだされ」た地震鎮めの歌のことが報告される。その歌「棟は八門八^{やう}戸^こ八ひとつ身八いざなぎの内にこそすめ」

が巷間に伝わったのは事実であるが、「この哥八、むかし、慶長の地しんに、其時の人、となへ侍へりし」と「ふるき人」が解説する場面などを了意は作為する。しかし、「家」の門バしらに、をしけれども、地しん八やまず、夜中に四十七度まで、ゆり侍へり」といったありさまで、歌の効果は全くなかった。そこで「ある人」このうたを翻案して、かくぞ、よみける」とした狂歌が紹介される。

むね八われかと八くづれて戸八ゆがみ身は小屋がけのうちにこそすめ

この歌についても実際は類似の歌がすでに巷間に流布しており、了意は事実取材しながら「ある人」の作歌として挿話を創る。九章の作為はこれにとどまらない。続けて「棟は八」の歌に対する了意の意見が示される。「すべて、哥のころ、いかなる事とも、しりがたし」とする了意の見解は、「疫癘の、はやりしころ」に門々に張りつけた「万葉の哥」も例に引く。これを「わけの聞えがたき証哥なれ、と、いへり」と、その誤謬を説いていく。さらに「世の愚俗ども、物のまじなひに、哥を、となふる事あり、その哥ども八、大かた八、わけもなき片言おほし」と、俗信を諷める。ここに至つて了意は作者としての素顔を出すだけでなく、「愚俗ども」へ警鐘を発する評論家としての姿勢を顕にする。『かなめいし』には啓蒙性の要素も加わった。

四

ここまで『かなめいし』上巻を悉さに検討することで、虚構化の方法についてその意図を探ってきた。ここでは歴史史料が簡略にしか記録しなかった寛文の京畿大地震を、了意は恣意的とも言える脚色を施し、そ

れぞれ物語化してみせている。そうした場合、上巻の構成にも了意は深い意図を込めているのではないかと思える。その構成を整理すると次のようになる。

序から一章にかけて、のどかな夏の一日から突然の地震発生時を再現する。それを受けて二章では人々の被災と避難の様相を報告する。三章・四章では、子どもや女性の凄惨な事故死を虚構化して、地震のもつ悲惨さを描写する。ここで読者が悲哀感の頂点に達するよう構成される。しかし五章から八章にわたって、七条から四条にかけての東山山麓の名所の被害を、名所記の要素を加えて報告する。さらに各地で慌てふためく人々の様相を、奇譚の文芸要素や滑稽譚の文芸要素へ傾斜して虚構化していく。それは平常心を失った人間が見せる、「わらひ種に、なる」(下巻・三章)べきありさまの戯画化とも言えよう。ここに至つて地震の恐怖・悲哀は後退し、滑稽性が前面に現われてくる。これは被害が比較的小さかったことによる余裕からの「ゆつたりとした描写」という一義的なものではなく、むしろ了意が意図的に虚構を構図化した結果である。九章では卑俗な笑いさえも導入しながら、天災からの無事を願って人々が「まじなひ」に妄信することを批判して、啓蒙していく。こうして騒動の一日が過ぎ、避難した人々の各地の小屋がけの模様も描かれる。十章では地震の夜に起こった奇怪な天文事象を報告しながら、「みだりがはしき、洛中のさつどう」(十章)の幕をひとまず下ろすのである。

万治二年に『堪忍記』『東海道名所記』を刊行、以下『可笑記評判』(三年)、『むさしあぶみ』『浮世物語』(寛文元年)、『江戸名所記』(二年)と、仮名草子作者として世に出て以来、了意は立て続けに作品を刊行する。それらは教訓書・評判記・名所記・見聞記などさまざまなジャンルにわたるが、多くの場合に文芸要素の複合性がみられる。

『東海道名所記』では東海道の名所、各宿場の風俗などを見聞・紹介

しながら、旅する主人公としての「楽阿弥」と「大坂辺の手代」の二者を創造した。当初より旅物語の構想が露呈しているうえに、「大堰川」での狂歌咄や「西坂宿」での遊女との交歓など（巻三）数々の虚構が挿入され、一場の滑稽譚となった部分も多くある。『むさしあぶみ』でも「楽斎房」に仮託された人物が、江戸の各所を移動することで明暦の大火の被害を見て回る設定がなされる。あるいは「石出帯刀」が科人たちを解き放った挿話も、「作者の読物としての潤色以外の何者でもなかるう」という創作意識がある。了意は同じ創作意識を『かなめいし』にも当用していく。仮名草子作品の多くは文芸要素の複合性にあり、一つのジャンルに分類することの困難があるが、『かなめいし』も同様であった。「報告文学」や「ルポルタージュ」「ノンフィクション」にとどまらない読み物としての娯楽性をも兼ね備えた作品として『かなめいし』は成立した。

注

- ① 「了意の報告文学」（『仮名草子新攷』・笠間書院 昭和五三年三月）
- ② 「かなめいし」（『日本近世小説史 仮名草子篇』第二章 勉誠社 昭和六一年二月）
- ③ 「仮名草子」（『時代別日本文学史事典近世編』第二部第一章 東京堂出版 一九九七年六月）
- ④ 『江戸のノンフィクション』「序」 白石良夫氏・法月敏彦氏・渡辺憲司氏の共著であるが、「序」の著者不明（東京書籍 一九九三年一〇月）
- ⑤ 前掲④
- ⑥ 前掲①
- ⑦ 「かなめいし」解説（『新編日本古典文学全集 仮名草子集』小学館 一九九九年九月）
- ⑧ 土田衛氏『かなめいし』解説（『愛媛大学古典叢刊八』愛媛大学古典叢刊行会 昭和四六年九月）

『かなめいし』の文芸性

- ⑨ 前掲書⑦
- ⑩ 井上和人氏（前掲書⑦ 頭注）
- ⑪ 『狩野亨吉氏蒐集文書十六』（『新収日本地震史料』所収）
- ⑫ 『吉田神社御広間雑記』（『新収日本地震史料』所収）
- ⑬ 前掲⑩
- ⑭ 「仮名草子四篇に見る天災地変の文芸性と記録性」（『近世文芸論叢』暉峻康隆編 中央公論社 昭和五三年六月）
- ⑮ 『玉滴隠見』巻十五（『内閣文庫所蔵史籍叢刊』四四所収）
- ⑯ 『梅辻家文書』（『新収日本地震史料』所収）
- ⑰ 前掲①
- ⑱ 前掲⑭

（大阪府立池田高等学校教諭）